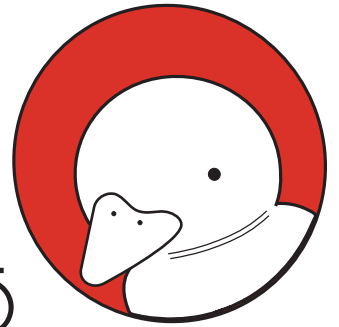




2021 年秋号（第 11 号）

学科旅行 in 奈良 —平城宮跡 & 東大寺—

11 月 5 日、奈良方面への学科旅行が行われました。歴史学科の学生 23 名、教員 4 名が参加し、全体を 2 班に分けて実施されました。

平城宮跡資料館では奈良文化財研究所の研究員の説明を受けながら常設展、企画展「地下の正倉院展—木簡を科学するⅡ—」を回った後、特別にバックヤードに入り木簡の整理室と収蔵庫を見学しました。



▲東大寺大仏殿前にて



▲地下の正倉院展の説明を受けている様子

整理室では、現場から持ち帰った土を洗って、遺物を回収して細かく分類する作業、木簡や漆紙に記された文字を赤外線カメラで読み取る作業の様子を見せていただきました。出土品の分類は木簡・割裂材・削屑、土器、木炭や樹皮、ハエの抜け殻、もみがら等多岐に渡ることをスタッフの方から聞き、参加者はその細かさに驚いていました。収蔵庫では木簡の保存状態を年に一度確認する作業のために学生アルバイトを採用しているそうです。

東大寺ミュージアムは東大寺に伝わる寺宝・収蔵品を保管・公開する施設です。有名な南大門と大仏殿の間に位置します。展示の見学に先立ち、寺院に付属する博物館の特色、境内の屋内外に点在する文化財の安置環境を

把握する仕組みや、遺跡の上に建設された博物館が収蔵品を守るための特殊な構造について学芸員の方に解説を受けました。修学旅行などで大仏殿を拝観したことがあってもミュージアムは初めてという学生も多く、展示室では仏像の迫力に圧倒されていました。

今年の学科旅行は元々 9 月末に予定されていましたが、感染症流行拡大を受けた延期を経て、幹事を務めた 3 回生有志の尽力で開催されました。学年を超えて交流し、文化財研究・管理の裏側を実際に見ることができる学科旅行は歴史学科ならではの行事です。特に日本古代史や考古学を志す学生、学芸員資格取得を目指す学生にとってはもちろん、まだ専門分野を絞れていない学生にとっても良い機会になったのではないのでしょうか。（中井・薄）



▲東大寺で説明を受けている様子

ギリシアローマ美術館 から学ぶ 歴史と文化

毎年、阿部拓児先生の西洋史史料演習では、授業の一環として京都ギリシアローマ美術館を見学しています。ここでは、今年の様子を紹介します。



3階では当時ギリシアで使用されていた宴会用の酒器を見学し、阿部先生から、「描かれた絵の表現技法の違いによって器の年代特定ができる」と解説を受けました。

2階では、動物をかたどった流酒器（リュトン）が展示されていました。これは、ペルシア戦争の際にペルシアからギリシアに伝わった品に着想を得た器で、コップとして使用されていました。

1階には、ギリシアの青銅像を基にした、ローマ時代の模刻像が数点収められていました。彫刻は常に重力を考慮して作られるため、その形の不自然さで作られた年代がわかるそうです。一般的に、古代ギリシアには石像のイメージがあると思いますが、青銅像はローマに征服された後、キリスト教の普及に従って鋳つぶされてしまいました。そのため、石像や後世に石で造られた青銅像の模刻だけが残っていると解説を受けました。

次に、実際に美術館を見学した学生の気づきを紹介します。北嶋さんは「何気ない展示物から当時の人々の生活や、文化、考え方がわかるのは面白いと思いました」と述べていました。また、他の学生は「彫刻の年代特定のために像と同じポーズをする発想は、今後彫刻を見る際の新たな視点につながりました」と述べていました。

ただ展示を見るだけではなく、授業の一環で先生の解説も聞くことができたので、より深く理解することができました。今回、先生からは器の年代特定に用いる絵の表現方法の違いなど、史料の分析に関することを多く教えていただきました。ぜひ今後の学びに活かしていきたいと思います。現在、京都ギリシアローマ美術館はコロナ禍で臨時休館が続いていますが、収束したら再度訪れたいと思いました。

(石川・小原・黒住)



▲京都ギリシアローマ美術館



▲阿部先生の説明を受ける学生